

同窓生シリーズ

⑪

子の行く路に  
祝福あれ

御苑を挟んで新宿高校と向かい合う通りに小児科医院を営んで十五年、

緑の見える待合室は子どもたちの声でいつも賑やかです。

子供は育って大人になる。その過程で心身ともに飛躍する節目は、私の場合中学三年――疎開から帰って、民主教育真っ只中の新制中学に転じた時でしょう。壁新聞もソフトボールも先生との会話も、記憶は細部まで鮮明です。秋の進学説明会

で、新宿高校がいか

に自由で活発かを語る女子先輩の言葉に、「ハーメルンの笛ふき」よろしくクラス仲間が大挙して、翌春その門をくぐった

のですから、思えば良き時代であったものです。生物部に所属して辻、石川両先生の生物室に足しげく出入りしたり、英作文コンクールに入賞してしまったり、学園祭で巫女を演じたり、エヒソードは結構ありながら記憶の輪郭が淡いのは、外に向かつて伸びた中学と反対に、高校では砂浜を素手で掘るように自分の内へ内へと向かったからでしょうか。受験を控えて進路を模索するつらい

気分には、読書は何より

の慰安であり、「チボリー家の人々」などの長編小説からは、あの時代あの年齢ならではのメッセージを受け取りもしました。

新米医師の最初の一年は驚きと緊張に満ちて、

長持ちしているとか。新婚の頃、飲み屋で担任だった坂本右先生にばったりお会いして、「この人を大事に伸ばしてやってくださいよ」と言われた相棒は編集稼業に没頭しています。果たしてそ

人とも十代には猛烈な反抗で痛烈パンチをくれま

した。親の自分が高校生だった頃の気持ちを忘れていたからでしょう。今やつとそれが判ります。

医師でもあった詩人ハンス・カロッサは、こんなふうに歌っています。

子の行く路に祝福あれ！

親の升目はもう一杯。

\* 初夏のまばゆい日差しの中先生の自宅を訪問、お話を拝聴する。子どもたちに対する愛情の深さ真剣さが感じられた。仕事に対する満足感もうかがわれ、うらやましい限り。さわやかな笑顔が印象的だった。

先生の今後には幸多かれ！



坂本貞枝氏(医師)  
昭和29年卒業・旧姓鈴木  
昭和11年東京生れ  
昭和35年慶大医学部卒業  
昭和49年新宿区認定・保  
医学博士小児科と検診  
地域医療活動センターの  
校医・保健師  
健康センター  
一外来

体力も気力も全開しました。次の年に人生の伴侶となった人物との出会い。高校に廻るのであるから、一六歳の眼は案外見えるようです(同期生カッブルは五、六組あってゆっくり楽しめます。)